

変形性膝関節症がある高齢者に対する思いを受け止めた支援

―座りきりの生活を変えるには―

17cc19 野口 紗辺瑠

I. はじめに

介護実習Ⅲでは、変形性膝関節症を持ちながらも、どういった方法で日常生活に楽しみを持つ事ができるのかに着目をし、取り組みを行った。実習を通した中で「自分がやりたい事」に対する意欲が会話を通じて見えたため、A様の思いを受けとめた支援を行う事が座りきりの生活にどういった影響を与えるのかについて考察を行ったので報告する。

II. 実習先種別・実習期間

実習先種別：ユニット型 介護老人福祉施設

実習期間：2018年6月25日～7月27日（うち23日間）

III. 受け持ち利用者の紹介

A様 女性 93歳 認知症 変形性膝関節症（両膝）要介護1

1. 家族構成及び生活歴

息子、娘がそれぞれ1人。娘は独立し実家をはなれた。息子は一緒に同居しながら理容店を営んでいたが、平成27年に急死。夫とは18歳で結婚し、息子と3人で理容店を経営していたが、昭和55年に他界し、娘夫婦と同居する。

2. 健康状態

・両膝に変形性膝関節症を患っている ・移動時に痛みの訴えはない ・言っていることと実際の状況が違う ・93歳 認知症のため、昔の記憶が思い出しにくく、新しい記憶が覚えられていない

3. 意欲・生きがい

社交ダンスが好きで、夫がいた頃はよく街の賑やかなクラブで踊りに行っていたとのこと

4. 1日の過ごし方

普段日中はユニットのホールで座っている事が多く、排泄時以外はほとんど立つことがないため、退屈そうに椅子に座っている。

IV. 介護の実際

1. 情報の解釈・関連づけ・統合

対象としたA様は何かをしたいという意欲はあるものの、「自分は体力がないから」「周りの人に迷惑は掛けたくない」といった事を理由で、日中いつもやる事がなく、ユニットの椅子に座り退屈しそうにしている様子である。

A 様は周囲に気遣いがあり中々自身の思うような生活を送る事ができず、座ったきりの生活になっていたため、できる範囲で A 様のやりたいことを実現する事により、喜びを感じていただけるよう一緒に行える活動に取り組みを行った。そうする事で QOL の低下や、認知症の進行を遅らせることができると考える。

2. 介護上の課題

A 様が趣味や特技としていた活動を取り入れる事で、生活の中に 1 つでも楽しいと思える時間をつくる必要がある。

3. 介護計画

長期目標：退屈と思える時間を少しでも減ることができる生活

短期目標：自分のやりたい事ができる時間をつくる

援助内容：一日の内、昼食までの余暇時間、おやつまでの余暇時間、夕食までの余暇時間を使う、また、1 人でできる事、2 人でできること、皆でできる活動を行う事で、楽しみを見つけられるようにする。

4. 実施及び結果

7 月 18 日から同月 25 日（うち 5 日間）実践を行った。動く時間や休憩時間、選択肢など細かな事をあらかじめ決めてから実施した事により、A 様の動きに戸惑いが無く、楽しく行えた。A 様から「今日はこうしたい」と活動に対する意欲が伺えた。よって実施前より生活に対して楽しみを見つける事ができた。また、実習最終日には踊りたいと言っていた社交ダンスを踊る事で「自分のやりたい事ができて満足です」と喜んでもらった。以上のことから、短期目標である「自分のやりたい事ができる時間をつくる」は、達成できた。長期目標である「退屈と思える時間を少しでも減ることができる生活」は、座りきりの生活を自分のやりたい事に変えたことにより、生活に楽しみをもつことができたため、達成する事ができた。

V. 考案

結果、座りきりの生活を変えることはほぼ達成できた。「退屈と思える時間を少しでも減ることができる生活」が達成できたのは本人の思いがあったからである。「人間の行動を促し、駆り立てて、方向づけている心のメカニズムを動機づけといいます。そして、それを決定づけていく欲求がある。」¹⁾のように実習生である自分が A 様と関わったことにより「体を動かしたい」という動機づけを引き出すことができた。欲求では、マズローの階層にあてはめると、社会的欲求の自尊心・承認欲求に該当する。本人の意欲がなければ、行動に移すことができないため、支援をしていく上での思いは大事であることが分かる。実習を通して A 様の思いを支援できた事により、生活をより良いものにできたと考える。

VI. おわりに

今回の実習Ⅲを通して介護過程の展開の評価・修正をして、受け持ち利用者を知っていく

上で、心身の障害や施設生活を送る中で物理的・社会的な条件によって欲求が阻害される事がある。その状況で介護福祉士は利用者の思いをどれだけ受けとめる事ができ、支援につなげる事ができるのかが求められていることを学ぶ事ができた。今後の課題は限られた状況の中で利用者の欲求や思いを形にできるようになる事である。

引用・参考文献

- ¹⁾ 山下雅子・下垣 光 (2007)『気持ち、やる気を高めていくということー情動・欲求・動機づけの心理学ー』介護福祉のための心理学 P. 163